

講演会 「東日本大震災と子どもの読書を考える」

講演『3.11 からの出発』について

2013年3月2日(土)
国際子ども図書館ホール

講師：松岡享子氏
(公益財団法人東京子ども図書館理事長)

その日のこと

こんにちは。もう2年が経とうとしていることに、本当に月日が経つのが早いのに驚いております。ちょうど、2011年3月11日は、私どもの図書館でイギリスの昔話に関する講演会を行ってまいりました。それで、イギリスの昔話を皆さんにいくつか聞いていただいて、そして今度は講師の先生に昔話についての講義を行っていただくということになっていて、その講義が始まった直後に揺れが始まりました。大変な揺れだったのですが、幸い私どもの図書館はしっかり建てられていたせいか、ちょうど飾ってあったお雛様の軽いぼんぼりが一つ倒れただけで、書架から本が落ちることもほとんどありませんでした。そして、私が皆さんに「この建物はとても丈夫だから外へ出なくてもいいので、しばらくじっとしててください」と言っていたら収まったものですから、それでまた講師の先生が、あまり気にしないですぐにレクチャーを続けておしまいになったものですから、途中何回か余震がありましたけれども、なんと皆—84名程参加者がいらっしやいましたけれども一、誰も席を立たず、4時半までみっちり講義を聞きました。

そして講義の後、さすがに少し心配だったので、本当は質疑応答の時間に入るところでしたけれども、皆さんにお帰りいただきました。ところが、帰れない人が続出したしまして、図書館と私の自宅で、約30名がその晩夜明かしをいたしました。イギリスの昔話の刊行記念の講演会だったため、そのためのちょっとしたパーティーを夜に計画していて、そこに食糧が届いていたものですから、大変助かりまして、次の朝も残り物を皆で食べて飢えることもなく、また電気が来ておりましたので、床暖房も入っておりましたから、寒いこともなく過ごしました。

私はお客様をお泊めしたりしたものですから、ばたばたしておりまして、その日もその翌日もほとんどテレビを見ませんでした。ですから、すごい津波の影響ですとかは、実は全然見ていないのです。その後、もちろんニュースに出てきましたけれども、本当にそういうものを見るという事を一所懸命しませんでしたので、ある意味、すごく生々しい衝撃から自分を少し守ったというようなことがございました。

その後、これはただならぬことだと思いましたがけれども、それをどういうふうに考えていいのかということ、正直もう全然分かりませんでした。そして2年経った今でも、私自身は、このことをどう捉えていいのか、自分の中にそれをどう収めていいのか、ということ、本当のことを言ってまだ分からないのです。それで、これは少し時間をかけて、自分の中で少しずつ納得させていかなければならないのかなと思っております。

支援活動の始まり

御存じの方も多いと思いますが、私どもの東京子ども図書館は1950年代から、もう半世紀も昔に、個人が自宅にある子どもの本を近所の子どもたちに開放して、そして一週間に1回とか2回、子ども達に本を読ませたり貸し出したりするような家庭文庫というところから始まりまして、1974年に財団法人という私立の図書館になりました。ですので、来年は40周年になります。その間ずっと活動を続けてきましたので、私どもの機関誌『子ども図書館』定期購読してくださっている方が、全国に4,000名ほどいらっしゃいます。その中の約半分の方々には、購読者である以上に、賛助会員になってくださって、私どもの私立図書館の活動を支えてくださっているのです。それで、地震の直後から、賛助会員の方や購読者の方から、今度の災害に対して東京子ども図書館は何をするのか、もし何かをするということであれば、協力するにやぶさかではない、というお電話ですとか、お問合せが入るようになりました。

私どもも、もちろん何かしたいと思いましたがけれども——だいたい私自身がぱっぱと動かないたちですから、すぐに何かをするというよりは、もう少し考えてから動こうと思っていたのですけれども——あまりにいろいろなところからお問合せがあるので、何とかしなければならぬかなと思っていました。そのときに、私が固く決心していたのは、被災地に本を送るということは絶対にしない、ということでした。

これはなぜかと言われると、私はこのような仕事をしていますから、関西地方にたくさんの友人や仲間がいるのですけれども、その人たちが阪神淡路大震災のときに、いろいろなところから本が送られてきて、それでどれほど困ったかということの色々聞かされていたのです。自分のところの図書館が非常に困難な状態になって、それを何とかしなければならぬのに、段ボールでどんどん本が送られてくる。しかも、中には、礼状をよこさないことに対してクレームをつけてくる人がいる。そういったことの対応をしなくては行かず、なおかつ送られてきた本の中で、図書館で置いておきたいような本がほとんどない。でも、それを処分することは、善意を損なうからできない、というようなことで、現場にいる人がどれほど苦労したかということ、私はしっかり聞いていましたので、本を送るということは絶対にしないということを初めから決めておりました。

もし本を送るということであれば、誰に送るのか、どこへ送るのか、どんな本を送るのか、誰が受けとって、それを必要な人に責任を持って届けてくださるのか、そのルートがきちんとできていないときに、ただむやみに本を送るということは絶対にしないということを、非常に固く決心しておりました。でも、早々と御寄付を送ってくださる方々も出始めたものですから、私どもとしては何かをしたい、まだ具体的には分かかっていませんけれども、助けてくださるなら助けてください、というお手紙を、4月に購読者や賛助会に発送し、それからすぐにお金が届くようになりました。

陸前高田へ

それで6月に、私と他の理事と職員の三人で、現地を視察するというので出かけました。私どもは、そんなに土地に知り合いがいるわけではありませんが、盛岡に本拠を置いている「うれし野こども図書室」というNPOがございまして、これは私立図書館の私たちのお仲間です。そのうれし野こども図書室というのは、盛岡に本拠を置いているのですけ

れども、岩手県下にたくさんのメンバーがいらして、そして、もちろん被災地にも大勢のメンバーがいて、その大勢が被災者になりました。代表の高橋美知子さんという方は、被災後 2 週間くらいたって、道路が通れるようになってからすぐ、メンバーの方達の安否を尋ねてずっと回られていたのです。それで、私はその高橋さんとふだんからお付き合いがありましたから、彼女に頼んで、彼女の車で被災地を、主にうれし野こども図書室のメンバーであるいろいろな人たちを訪ねながら回るということを行いました。そのときは、陸前高田から始まって、大船渡、釜石、大槌、山田というように、三陸の沿岸の通れるところを全部通って、最終的には宮古まで行って、いろいろなところでいろいろな人に会ったり、避難所や仮設の学校を訪ねたりいたしました。

そして、帰りに仙台にも寄って、そこで文庫活動をしていらっしゃる代表者の方 7 名ほどとお会いして、お話をしたりしたのですけれども、そのときに思ったのは、何といても陸前高田が一番ひどいということでした。一つには、大船渡や釜石、山田といった他の所は、道路を曲がりながら進んでいると、被害のある所が見えて、またそうでない所が見えて、となるのですけれども、陸前高田は真っ平らで見渡す限りが瓦礫というような所だったし、その凄まじさの圧倒的なこととといったらないのです。それから図書館が全滅しているだけではなくて、教育委員会の職員もほとんど全滅していました。100 人くらいの中で、6 人くらいしか生き残っていらっしゃらないというような状況だったものですから、もうこれは陸前高田を焦点にするしかないとそのとき思いました。

高橋さんは、とにかく早くなんとかしなくてはいけないということをとっても考えて、陸前高田に雪が降る 11 月までにどうあっても図書館を作ると、無謀とも何とも言い難いんですけれども、もうその時に彼女は固く決心しちゃったのです。私は、やはり地元の人が動かないと駄目だと思いましたから、とにかく全力を上げて、高橋さんの陸前高田での図書館作りを協力しようと決めました。

トレーラーハウス「ちいさいおうち」の誕生

協力の仕方にはいろいろあるのですけれども、時間がないので端折ってお話ししますと、建物を建てるということは非常に難しいということが分かったのです。というのは、復興のための区画整理というのができていないので、図書館を建てても、そこにそのままいられるかどうか分からないということがありました。そういうことを言っている間に、トレーラーハウスというアイデアが出てきたのです。それであれば、区画整理でここは別の場所だ、となったときに移動することができ、費用もかなり安く、そして寒冷地仕様のもので使えばしっかりしたものができると、というようなことが分かりましたので、トレーラーハウスの図書館にするということを決めたのです。建物は、ジャパン・プラットホームというところと、東日本大震災復興支援財団という二つの財団から助成を頂いてできました。

それから私が、何をここに支援したいか、ということを考えて時に、それは、人を支援することが一番大事だと思いました。というのは、どれほど建物がよくても、どれほど設備が良くても、そこにいる人がちゃんとした仕事をしてくださらないと、そこは生きてこないということ、常々考えていたからです。それと、私自身が 40 年にわたって私立図書館を運営してきて、助成をしましようという団体はなくなりました。物に対する助成、例えば、コピー機を買ってあげますというところはあります。それから、イベントに

対するお金を出してくださるところもあります。だけど、物を頂いても、それを活用するイベントを行うためには、イベントを行う人が必要です。また、イベントのために人からお金をもらうとなると、恒常的な仕事をしながら、イベントもしなければいけないので、全部職員の加重負担になります。そして、報告書を書かなければいけない、何をしなければいけないと、どんどん大変になってくるので、助成を受けることによって疲労困憊するといった恐れがとともあるのです。何かをするためには、母体である財団そのものの運営がしっかりしていないとできないのに、それを支えてくださるためのお金を出してあげましょうというところは、どこにもないのです。毎年お金の心配をしながら、40年間私立図書館をやってきて、それはもう痛いほど分かっていました。例えば、本を送ってくださいというと、本を送ってくださる方はいるかもしれないですけども、ここで働く人の給料を出してくださると言ったときに、すぐ出してくださる方は絶対にいないということは分かっていましたから、私どもがそこで働く人を雇って、その人の人件費を全部負担して、働いてもらおうというふうに決めたのです。

それで、とてもいい方が見つかりました。ご本人が大船渡で、ご両親のお家も、ご自分のお家も被災して、そして御自身も仮設住宅で長い間暮らさなくてはならない方でしたけれども、うれし野こども図書室のメンバーで、お話とか子どもの本について勉強もしていたし、非常勤ではあったけれども、公立の図書館で8年間の勤務経験がある方が見つかったので、その人をお願いしました。これは本当に大成功でした。お人柄もいいし、知識もあるし、意欲もある。その方を得たことで、「ちいさいおうち」というこの図書館が随分うまくいくようになったと、私は思っています。それで、その人と、それからもう一人、アシスタントの方の人件費を東京子ども図書館で負担し、その方たちを東京に一月か二月に一回呼び寄せて、研修を受けていただく。そのための費用を私たちが負担する、というふうに考えて、スタートいたしました。高橋さんの本当に献身的な御努力のおかげで、11月のそれも初雪が降る25日でしたけれども、本当に心温まるいい開館式ができました。

いろいろな支援の取組

私たちの3.11の仕事は、この「ちいさいおうち」を支援することが一つ、それから、ほかにもう一つありました。それは、私どもの「おばあさんのいす」という活動で前から関係のあった、小友小学校をお訪ねすることです。これは私が、誰かもう一人連れて、ほとんど毎学期に一回、あるいはもう少し高い頻度で行っておりまして、実は今度も18日に卒業式に行くことになっております。その学校に私たちのお勧めする本を少しお送りして、その本の中から、子どもたちに自分の好きな本を選んでもらって、そしてその本に「〇〇くんへ」といったようにお名前を入れて、毎学期のお休みの最後の日の終業式に一冊ずつお渡しします。春休み、夏休み、冬休みごとに1冊ずつ、子どもたちに、その子の選んだ本に名前を書いて渡す、というようなことが、小友小学校での活動です。

それから、お隣の大船渡には「おはなしころりん」という、お母さんたちの読者支援グループがあり、江刺さんという非常にバイタリティーのある女性の方がいて、がんばっています。震災の直後から、自分の軽自動車に本を入れて避難所回りをしたりするような、仕事を一生懸命している方なのですけれども、とにかく人が足りないので、もう少し自分たちと一緒に働いてくれるボランティアを増やしたい、とのことでした。そこで、ボラン

ティアを増やすための講座のようなものに私が出かけて行って、皆さんに、こういうことをやってくださいとお勧めする活動があります。

また、本部の東京子ども図書館のほうでは、もし、全部蔵書が流された図書館や、学校図書館や文庫で、今から本を買うにはどうしたらいいかと思っただけの人に、こういう本を買ってくださったらいいですよ、これは全部今在庫があって、手に入る本ばかりですから、という「3.11のためのブックリスト」というものを作りました。これは今、1,000冊までできていて、後ろに置いてありますけれど、そういうものを作って被災地の方に活用していただくという仕事をしております。

支援活動のこれから

この大震災は恐らく、一世代ではカバーできないほどの大きな災害だと思いますが、私たちの希望としては、少なくとも私たちは、10年くらいは活動を続けたいと思っております。

10年くらい長く続けるということと、私たちがふだん行っていること、つまり子どもと本を楽しく出会わせるということが鍵になってする活動になるということと、知らないところへどきどきと本を送るような、そういう形ではなくて、一人一人の顔が見えるところにつながりながら仕事をするということと、それから、もしも、復興という枠が外れて、私たちが陸前高田から手を引くことになったとき、そのときまでに陸前高田の中に子どもの本のことを心にかけて、ボランティアの仕事をしたりしてくださる方が育っていて、後を託すことができるように、そしてなおかつ、私たちが被災地に出かけて行った仕事の実りが、東京子ども図書館の活動の中に豊かに帰ってくるように、つまり、それが終わったときには、被災地のほうも、私たちも、その活動から豊かな実りを受けることができるようになるように、という四つの法則を立てて、今の活動を続けています。

絵を見ていただいたほうがいいと思いますので、「ちいさいおうち」が映っていますけれども、活動を少し見ていただきたいと思います。

このトレーラーハウスは長野でできました。これにも、長野の「おはなし畑」というボランティアグループの人たちが、内装の本棚づくりやその他全部に協力してくださって、そして製作会社の社長さんも随分協力してくださって、実際お金が出ると決まったのが9月だったのですが、本当に一月くらいしかなかったのに、しゃかりきで作ってくださって、11月15日に動いて行きました。

絵本の『ちいさいおうち』（ばーじにあ・ばーとん 文・絵；岩波書店 訳編、岩波書店、昭和29）というのはおうちがお引っ越しをするお話ですけれども、そういうふうに乗って、「小さいおうち」が15時間かけて夜通し走って、午後2時くらいに出発したでしょうか、翌朝の明け方に当地に着きました。

この土地は市が提供してくれて、なおかつ、市が光熱費も出してくださる。それからアルバイトの職員を一人、市から出してもらっています。建物はNPO法人の持ち物ですし、職員は東京子ども図書館の職員ですけれども、地代は払わずに済み、光熱費も市が持ってくれて、民間と地方自治体のいい協力関係でっております。このようにしてずっと動いていきました。

それで11月、これが備え付けられたところです。ウッドデッキなどができ、11月の25日に開館式が行われました。子どもたちと、それからうれし野こども図書室の代表の高橋さんが映っております。こちら側は東日本大震災復興支援財団—ソフトバンクの財団です—の若い代表の方が来てくださっています。

これが内部です。テーブルと本棚は全て、今申し上げたように、長野のボランティアグループの方が手作りしてくださいました。

これは開館式なのですが、子どもたちに私がお話をしているところです。

これが今、使われている様子ですが、少し日経ちまして、これは、登録しているところですね。このかたが、吉田さんという今の職員の方です。

季節ごとに、七夕があったりいろいろ行事をしたりします。お父さんやお母さんも来て、夏になるとたくさんお花も飾られて、綺麗になります。ここは高台で瓦礫とかそういうものはここからは全然見えず、緑が見えて、その意味ではとても心の休まる場所です。

これがボランティア養成講座を行ったときの写真です。

これは小友小学校です。子どもは、去年は84人だったのが、今年は74人に減ってしまい、これは全校生徒です。これは2回目に行ったときです。

もう時間がきてしまいました。私たちとしては、先ほど申し上げたように、これから先10年くらいは支援を続けたいのですが、初年度に、皆さんからいただいた御寄付が、なんと2,000万円もありまして、もう本当に感激いたしましたけれども、人件費はやはり年間400万円くらいはかかりますので、10年は持ちこたえられません。それで、私たちもお金を稼ぎながら運動を続けなくてはならないということで、会場の後ろにも置いていますが『うれしいさん、かなしいさん』（まつおかきょうこ さく・え 東京子ども図書館、2012.9）という絵本を出したり、手ぬぐいを売ったりと、自分たちでいろいろなことをしながら、頑張っております。まだ大事なことで言いたいこともあったのですが、時間になりましたので、後でお時間をいただけるときに、少し補足できればと思っております。